

【資料紹介】

孫文支援者・山田純三郎が残した写真資料の紹介 —孫文や革命家たちから贈られた写真を中心として—

愛知大学東亜同文書院大学記念センター研究員 武井 義和

本稿は、孫文の革命支援者・山田純三郎が残した写真資料の中から、山田が孫文はじめ革命家たちと関わりがあったことを示す写真を、山田に贈られたものを中心として何点か紹介するものである。山田純三郎（1876～1960年）は津軽弘前に元津軽藩士・山田浩蔵の三男として誕生、兄で長男の良政（1868～1900年）の遺志を受け継ぐ形で、辛亥革命期から孫文の支援者となり革命の表舞台に登場した。それ以降、1925年に孫文が亡くなるまで秘書役の形で孫文の活動を支え続けた。

山田純三郎のそのような人生については、一般的な読者向けの図書である結束博治『醇なる日本人』（プレジデント社、1992年）、保阪正康『仁あり義あり、心は天下にあり』（朝日ソノラマ、1992年）、同『孫文の辛亥革命を支えた日本人』（筑摩書房、2009年）で記されている。結束氏の著作は山田兄弟の全生涯を描いた作品であり、保阪氏の著作は孫文の革命活動を軸に、山田純三郎を中心に宮崎滔天はじめ他の日本人革命支援者も登場させつつ、彼らの孫文逝去時までの活動を描いたものである。また、写真資料を中心に紹介したものとして、『愛知大学東亜同文書院大学記念センター収蔵資料図録』（愛知大学東亜同文書院大学記念センター編集発行、2003年、2005年改訂版）や、山田兄弟の出身地である弘前や青森県と兄弟との繋がりを意識しつつ、彼ら兄弟の生涯を写真資料で紹介したブックレット形式の武井義和『孫文を支えた日本人 山田良政・純三郎兄弟』（東亜同文書院大学記念センター編、2011年、2014年増補改訂版）がある。

しかし、今回紹介する写真は上記『収蔵資料図録』や『孫文を支えた日本人』では紙幅の都合上取り上げられなかったものであり、また、すでに掲載している写真資料とあわせて、山田の孫文革命支援活動における人的ネットワークを考察する上で重要な手掛かりになるといえる。こうした観点に立ち、本年2016年は孫文生誕150年、山田純三郎生誕140年という節目の年にあたることにもちなんで、リサーチの都合上一部ではあるが、冒頭で記したように山田に贈られたものを中心に、孫文や革命家たちと山田との関わりを示す写真を紹介することとする。主に1910年代から20年代の時期のものを対象とするが、山田に特に関わりがある人物の場合は1930年代の写真も一部含んでいる。

主な参考文献

調査やキャプション執筆に際して用いた参考文献やインターネットは以下のものである。

- ① 『朝日新聞』1958年6月22日（「聞蔵Ⅱ」朝日新聞記事データベース）
- ② 池田誠ほか『図説 中国近現代史』（法律文化社、2009年）
- ③ イスラエル・エプシュタイン著、久保田博子訳『宋慶齡 中国の良心・その全生涯』上（サイマル出版会、1995年）

- ④ 結束博治『醇なる日本人』(プレジデント社、1992年)
- ⑤ 小坂文乃『革命をプロデュースした日本人』(講談社、2009年)
- ⑥ 『孫文・梅屋庄吉と長崎 受け継がれる交流の架け橋』(長崎新聞社、えぬ編集室編集制作、長崎県、長崎市、長崎歴史文化博物館発行、2011年)
- ⑦ 『「孫文と横浜」展』(有隣堂、1989年)
- ⑧ 武井義和『孫文を支えた日本人 山田良政・純三郎兄弟』(東亜同文書院大学記念センター編、2014年増補改訂版)
- ⑨ 『中国人名資料辞典』第8巻、1999年、日本図書センター(ただし『現代中華民国満州帝国人名鑑 昭和十二年版』の復刻版)
- ⑩ 保阪正康『仁あり義あり、心は天下にあり』(朝日ソノラマ、1992年)
- ⑪ 同 『孫文の辛亥革命を支えた日本人』(筑摩書房、2009年)
- ⑫ 何大章『宋慶齡与孫中山』(中国文史出版社、2015年)
- ⑬ 『国父年譜』上、下(中国国民党中央党史史料編纂委員会編輯、中華民国各界紀念国父百年誕辰籌委員会、台北、1965年)
- ⑭ 徐友春主編『民国人物大辞典 増訂版』上、下(河北人民出版社、2007年)
- ⑮ 『宋慶齡在上海：紀念宋慶齡誕辰一百周年』(上海孫中山故居、宋慶齡故居和陵園管理委員会編、上海人民出版社、1992年)
- ⑯ 『孫中山先生画冊』(中国人民政治協商会議全国委員会、文史資料研究委員会、中国革命博物館編、中国文史出版、1986年)
- ⑰ 『図文 20世紀中国史 1920-1929』第3巻(広東旅游出版社、1999年)
- ⑱ 劉国銘『中国国民党百年人物全書』(團結出版社、2005年)
- ⑲ 黎東方『細説民国創立』(上海人民出版社、1997年)
- ⑳ 「辛亥英魂 中華民國建國百週年文物特展」(<http://www.ngensis.com/1911/1911.htm>)

1. 孫文と宋慶齡

ここでは山田純三郎が支援した孫文と、彼の夫人である宋慶齡の写真を取り上げる。



(1)孫文のサイン入り写真

山田純三郎に贈られた写真。台紙下に「同生照相 上海北四川路」とあることから、上海の写真館「同生照相館」で撮影されたことが分かる。1912年夏に撮影されたものと思われる。(参考文献⑩参照)



(2)三菱合資会社上海支店長に招かれた孫文、黄興たち

中央に孫文と黄興の姿あり。左端は山田純三郎、左から5人目黄興。黄興の左斜め後ろは宮崎滔天。1912年秋、上海六三亭にて。(参考文献⑦参照)



(3)日本を公式訪問した孫文の歓迎会

孫文は1913年2月から3月にかけて「全国鉄路督弁」として日本を公式訪問した。東京滞在中は東亜同文会で講演を行ったほか、紅葉館などで開催された孫文の歓迎会にも臨んだ。写真は1913年3月1日、東京日比谷にある松本楼で開催された歓迎会の様子である。白線で丸く囲った男性のうち、前列が梅屋庄吉（映画会社日活の創業者）、後列が孫文、四角で囲った人物は山田純三郎。（参考文献④、⑤、⑧、⑩、⑪参照）



(4)結婚直後の孫文・宋慶齡夫妻

孫文と宋慶齡が1915年10月25日に東京で結婚後に撮影された写真。1916年4月24日に東京日比谷の大武写真館で撮影された一枚と思われる。当時、孫文は1913年の第二革命による失敗で日本に亡命したが、中華革命党結成などの革命工作を行っていた。宋慶齡はアメリカ留学後の1913年来日し、孫文の英文秘書としての活動を経て結婚した。（参考文献③、⑤、⑥、⑫、⑯参照）



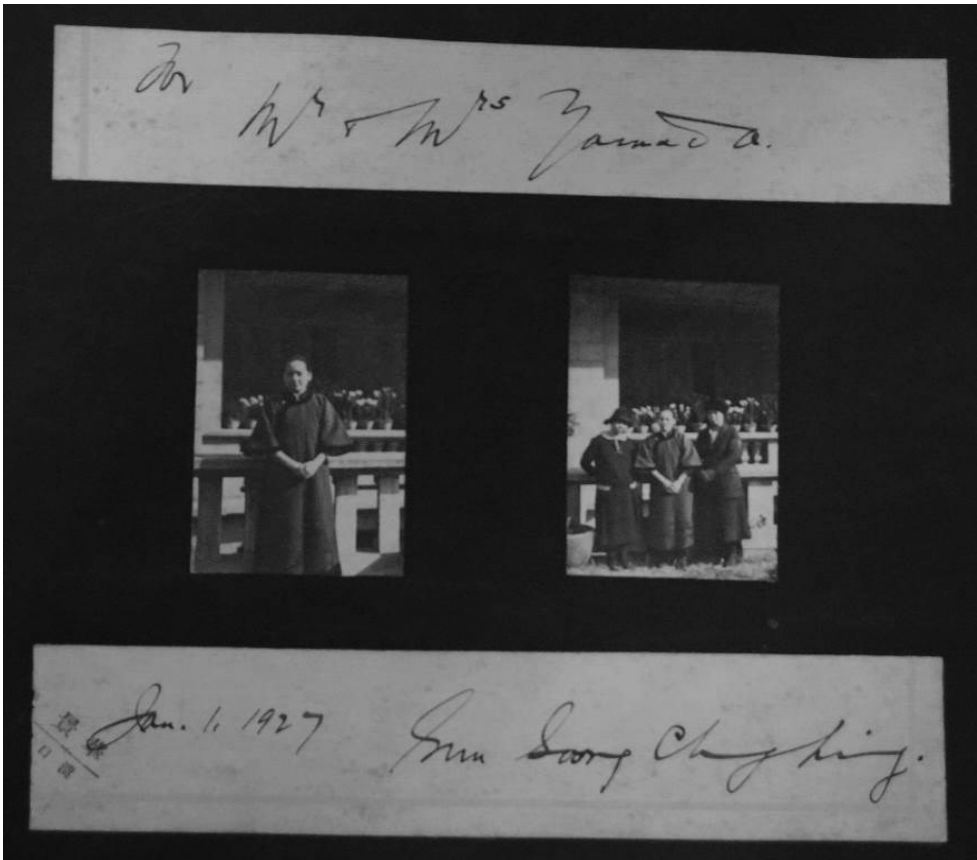
(5)神戸出発前の孫文・宋慶齡夫妻

1924年11月撮影。孫文・宋慶齡夫妻は広東から張作霖、段祺瑞らと会見するため北京に向かう途中、神戸に立ち寄った。孫文は「大アジア主義」講演を行い、宋慶齡も兵庫県立高等女学校で女性解放問題に関する講演を行った。その後、夫妻は天津へ向かったが、東京から神戸で合流した山田純三郎も同行した。孫文は1925年3月12日に北京で死去。彼の臨終の際に山田純三郎は宋慶齡に病室に呼び入れられ、死に水を取った。

写真とともにアルバムには「Mr & Mrs Yamada」（山田夫妻へ）、「Peking Feb.14.1925」（北京、1925年2月14日）と記されたサインがあるが、孫文が北京で死去する約1ヵ月前の時期である。(7)のサインと比較すると筆跡は宋慶齡のものとはほぼ同一である。写真との関係性は明確ではないが、ともに貼付されていることを考えると、日付けは写真が山田夫妻に贈られた年月日と発送場所を示すものかとも推察される。(参考文献③、④、⑦、⑧、⑩、⑪、⑫参照)



(6)宋慶齡写真



(7)宋慶齡が写る写真とサイン

左に宋慶齡の写真、右に宋慶齡と女性2人の集合写真があり、「For Mr & Mrs Yamada」(山田夫妻へ)、「Jan. 1, 1927 Sun Soong Chingling」(1927年1月1日 孫宋慶齡)のサインがある。サインが記されている紙には「華景 漢口」の文字が見えることから、

漢口でサインされたことが分かる。もともとは写真が貼られていた台紙かと思われるが、これら2点の写真か別の写真かは不明である。

宋慶齡は1926年1月に中国国民党中央執行委員会委員に選出され、北伐軍による武漢攻略後の同年11月に国民党中央政治会議が広州から武漢への遷都を決定すると、12月武漢に入り、政府最高首脳の一人名になった。翌年武漢国民政府の成立後は、同政府で中央政治会議分会の一員をはじめ、中央政治委員会委員や国民政府委員なども務め、要職の地位にあった。(参考文献③、⑮、⑰参照)

2. 孫文や山田純三郎に関わりのあった革命家たち

ここでは、革命家たちから山田純三郎に贈られた写真の一部を紹介することとする。



(1) 蔡濟民(1887~1919年)

写真は武昌起義後、辛亥革命直後の時期に撮影され山田純三郎に贈られたものと思われる。蔡濟民は清末より軍人の道を歩むが、1910年共進会に加入、間もなく群治学社に入る。その後中国同盟会に加入。1911年6月中国同盟会湖北省支部参議部部長となる。武昌起義前夜、文学社と共進会が組織した最高機関により蔡は軍事準備員に推され、また文学社総機関部により総参議に推された。各革命軍組織が起義を起こす準備を行うと、蔡は参議部長に推された。

ここで登場する共進会とは、1907年東京で成立し、中国同盟会の外郭団体として秘密結社分子を吸収して革命を推進した団体である。湖北省を中心として活動を行った。一方、群治学社も革命団体であり、1908年12月に誕生したが、同年7月に結成された湖北軍隊同盟会が改組されたものである。1910年には振武学社、さらに1911年1月には文学社に改組するという変遷をたどっている。蔡は文学社が成立すると文学社に加入し、また共進会と文学社の合併に尽力した一人であったため、辛亥革命直前の時期に複数の主な革命団体に所属した人物であったことが分かる。

武昌起義が勃発すると兵を率いて戦い、1912年2月南京臨時政府陸軍部軍務司司長となる。同年10月には北京政府より陸軍中將の位を授けられるが、1913年の第二革命失敗後日本に逃亡。1914年6月中華革命党に加入し、1915年孫文により湖北省討袁軍総司令を任命される。1916年帰国し漢口で決起するも失敗。1917年9月第一次広東軍政府が樹立されると湖北軍総司令に任じられる。湖北省で軍事面にに関わり、1919年1月に現地で殺害された。(参考文献⑭、⑰参照)



(2) 吳醒漢(1883~1938年)

写真には「武昌起義前秘密機關參議部參議現充湖北軍備司長」とある。吳醒漢は清末より軍人の道を歩むが、1906年中国同盟会に加入し、また同志と將校研究団を組織、ほどなく共進会に加入するなどの行動をとった。「秘密機關」とはこれらの組織を指していると思わ

れる。

1911年に勃発した武昌起義に参加し、漢陽の戦いで戦時総司令部作戦主任参謀になる。後に湖北軍務司司長、軍備司司長、都督府参謀長を歴任、また護軍司令を兼ね、陸軍中將の位を授けられた。1912年8月には中国国民党党部評議になっていることから、「現充湖北軍備司長」と記されていることとあわせて考えると、この写真は辛亥革命後1912年8月までの間に山田純三郎に贈られたものと思われる。

なお、呉はその後第二革命の失敗で日本へ逃れ中華革命党に入党、袁世凱の死後は黎元洪の北京政府総統府顧問になるが、1917年第一次広東軍政府に加わった。(参考文献④参照)



(3)鄧鏗(1886~1922年)

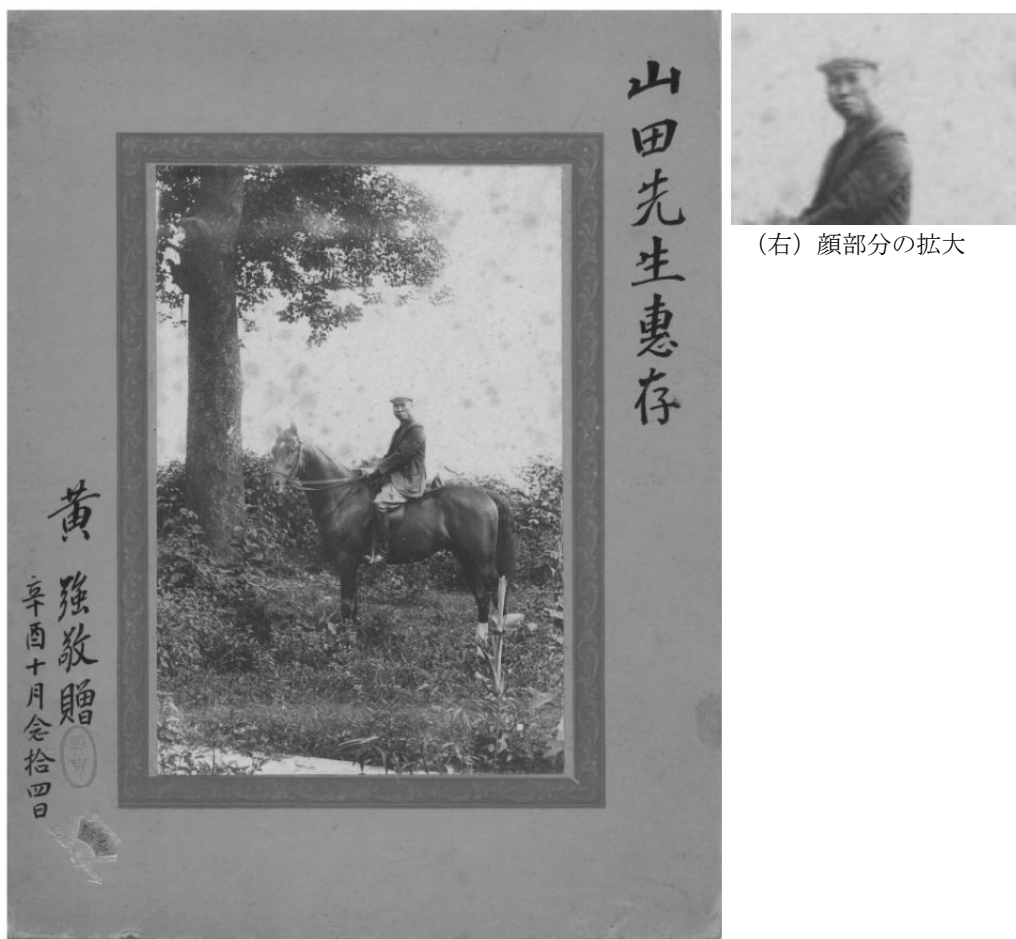
清末より軍人としての道を歩むとともに、革命に関与した人物である。1910年広州新軍起義に参加し、1911年黄花崗起義の失敗後に香港へ逃亡。辛亥革命後の1912年広東都督府陸軍司司長兼稽勳局局長を務める。1913年第二革命失敗により来日、1914年中華革命党に入党し軍務部副部長に就任。1916年5月孫文により中華革命軍東江総司令に任じられ、広東で袁世凱討伐を取り仕切った。1917年第一次広東軍政府に参加し、同政府が粵軍を成立させると参謀長に任じられた。1920年粵軍参謀長兼第一師長に就任したが、1922年広九駅で狙撃され死亡した。

この写真は1917年から22年の間に撮影され、山田純三郎に贈られたものと考えられる。(参考文献④参照)



(4)徐紹楨(1861～1936年)

1904年両江兵備処総裁となり、新軍訓練の任を負う。江南第九鎮が成立すると師団長となる。1911年に武昌起義が起こると新軍を率いて南京へ進軍、後に江浙聯軍司令に推される。1912年1月同職を辞任するが、同月孫文によって南京衛戍総督に任じられる。1917年第一次広東軍政府に参加し、1918年3月軍政府衛戍総司令代理、1920年6月には孫文により両広各路招討軍総司令に任じられた。1923年2月広東省省長に就任。同年5月大本営内政部部长に転任、後に総統府参軍長、国民政府委員などの職務を歴任した。(参考文献⑭参照)



(5)黄強(1892*~1974 年)

写真が贈られた年月日は「辛酉十月念拾四日」であったことが分かるが、「辛酉」は 1921 年にあたる。「念」は「二十」を表わすため、1921 年 10 月 24 日である。

清末の 1907 年より 09 年まで保定陸軍速成学堂で学ぶ。1910 年広州新軍起義に参加したことで逮捕されるが友人に救われ、その後軍人として昇格。辛亥革命後の 1913 年には広東都督府軍務課課長に任じられたが、同年第二革命に参加したためパリに逃亡。1916 年広東省政府諮議に招聘され、後に広東兵站総監、広東工芸局局長を務める。1921 年粵軍第七路司令に就任。孫文死後は広東省保安処所長兼第十九路軍教導隊主任（1930 年）、第十九路軍参謀長（1932 年）などを務めた。（参考文献⑭、⑰参照）

（※劉国銘『中国国民党百年人物全書』では生年が 1887 年となっている）



(6) 許崇智(1887～1965年)

「民国十年」すなわち 1921 年 11 月に広州で撮影され、山田純三郎に贈られた写真。

日本陸軍士官学校で学び、1905 年中国同盟会に加入。卒業後帰国し福建武備学堂教習などを歴任。1911 年武昌起義が勃発すると挙兵、福建軍総司令に推される。1912 年孫文の命を受け陸軍第十四師師長に就任。第二革命失敗後は日本に渡り中華革命党に加入、軍務部部長兼福建司令長官となる。1916 年帰国、1917 年第一次広東軍政府大元帥府参軍長となり、10 月中華民国軍政府陸軍総長臨時代行を務める。1922 年 5 月粵軍第二軍軍長、1923 年 11 月粵軍総司令に任じられる。1924 年国民党第一回中央監察委員候補に当選、大本營軍事部部長となる。孫文死後の 1925 年 7 月に広東国民政府が成立すると国民政府委員などに推される。南京国民政府成立後の 1929 年に一時下野するが、1931 年南京に対抗して広東国民政府が成立すると国民政府委員兼軍事委員会常務委員に推された。広東国民政府と南京国民政府の合流後、1935 年には国民党第五回中央監察委員に当選するなど、南京国民政府で要職を務めた。(参考文献⑩参照)



(7)王大楨(1893～1946年)

1909年秋中国同盟会に入会。1911年の武昌起義中に革命軍に加わり、黄興にしたがって漢陽を守る。1916年日本に留学、1921年のワシントン会議では中国代表团顧問官を務める。帰国後は山東省方面の要職に従事し、1924年に山東省講習所所長を務める。1925年日本へ研究に赴き 1926年北伐時に帰国、国民革命軍第八軍第二師参謀、第三十五軍参謀長を歴任し、安徽省軍事庁庁長も兼ねた（武漢政府任命）。政府が南京と武漢に分裂した後、総代表の身分で蒋介石に面会し、国民革命軍総司令部参議に任じられた。その後 1928年に済南事件が起こると駐日特派員として交渉を行った。帰国後、中国外交部条約委員会顧問に就任。

山田純三郎も北伐時に蒋介石と面会しており、したがってこの写真はその頃に王より贈られたものと思われる。(参考文献⑧、⑩参照)



(8) ^{たんえんがい}譚延闓(1876～1930年)

清末、湖南諮議局長を務める。辛亥革命時に湖南軍政部長、1912年湖南督軍に任じられ、第三革命後の1910年代後半には湖南督軍兼省長を務める。孫文のもとでは広東軍政府秘書長、内政部長、建設部長などを歴任し、1924年国民党第一回中央執行委員、孫文死後の1926年には国民党第二回中央執行委員に挙げられた。同年蒋介石による北伐の開始後、国民政府常務委員主席、中央政治会議主席代理として蒋介石を後方より支援し、北伐完了後は国民政府行政院長、国民政府行政委員に任じられた。(参考文献⑨参照)



(9)劉紀文(1890～1957年)

左の写真は「十七年三月」と日付けが入っているため、「民国十七年」すなわち 1928 年 3 月に贈られた写真であったことが分かる。南京国民政府財政部江海関監督を務めていた頃にあたる。

劉紀文は 1910 年広州起義（黄花崗起義）に参加し、同年中国同盟会に加入。辛亥革命後日本に留学し、1914 年中華学生部結成時には総務部幹事を務める。1917 年 9 月に孫文が第一次広東軍政府を樹立すると、財政部の全てを任され、ほどなく広東省金庫監理、広州市監査所所長となったほか、1920 年以降は陸軍部軍需司司長、大本營設立の監査局局長、大本營軍需所所長などを務めた。南京国民政府樹立後の 1927 年 5 月、南京特別市市長に就任。財政部江海関監督を経て 1928 年 7 月南京特別市市長に再任された。1931 年蔣介石率いる南京国民政府に反対する広東国民政府が成立すると、中央執行監査委員、広東国民政府政務委員会常務委員を担当したが、翌年両政府が統合した後は南京国民政府の要職を務めた。

なお、山田純三郎も広東国民政府の外交部顧問に招聘されており、山田と劉がともに写る同政府要人たちの集合写真も残されている。（参考文献⑧、⑭参照）



(10)居正(1876~1951年)

「同年」と記されていることから分かるように、山田純三郎とは生年が同じである。写真が贈られた具体的な年は不明だが、1920年代末か30年代前半と推察される。1907年日本留学中に中国同盟会に加入し、1911年の武昌起義後から革命家として活動した。1912年1月南京臨時政府内務部次長に就任したが、1913年第二革命失敗後日本に亡命し、中華革命党に入党。1917年第一次広東軍政府内政部政務次長に任じられ、また内政部総長代理を暫く担当した。1919年上海で中国国民党総務部長に就任。1922年5月広東護法政府内務部総長、1924年1月国民党第一回中央執行委員会兼常務委員に当選、孫文死後は右派となった。(参考文献⑭参照)



(11)陳中孚(1882～1958年)

「二五、五、一四」と日付けが記されている。「二五」は民国二十五年すなわち1936年を示す。国民政府の冀察政務委員会外交委員会委員長にあった頃にあたる。

陳中孚は山田純三郎と関係が深い人物である。1919年10月に青森県弘前市の貞昌寺に山田良政碑が建立された際には、孫文により派遣され、碑前で孫文や唐紹儀の祭文を朗読している。また、1929年には山田純三郎に対し青島接收専員辦公署高等顧問就任の招聘状が陳の名で出されたほか、1931年に成立した広東国民政府にも参加、同政府要人たちの集合写真で外交部顧問に招聘された山田純三郎と陳がともに写る姿も確認することができる。

陳中孚は日本の法政大学を卒業。清末より革命運動に参加し、辛亥革命後中華革命党に加入。1916年第三革命時には東北革命軍総司令部参謀、運糧局局長ならびに総司令代理を任じられる。1917年第一次広東軍政府大元帥府軍事委員会委員となり、1923年第三次広東軍政府大本営参議に就任。また、孫文死後に誕生した広東国民政府の秘書に1926年任じられる。蔣介石率いる南京国民政府が誕生すると、既述のように1928年国民政府青島接收専員となるが、1931年広東国民政府に加わる。日中戦争後は汪兆銘政権に関わり、戦後日本に移住し東京で亡くなった。(参考文献①、⑧、⑭参照)